

音楽芸術と共生する未来創造への取り組み



三味線プレイヤー 史佳Fumiyoshi
株式会社WORLD COMPASS 代表取締役 小林史佳

▶ 新型コロナウイルスの感染拡大によって受けた影響

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、三味線プレイヤー史佳Fumiyoshiとして受けた影響

- ① 4月12日にコンサートホールで開催を予定していたジャズ・ベーシスト“ロン・カーター氏”との共演コンサートの中止。
- ② 7月一杯までの依頼案件の全キャンセル。
- ③ 新規での演奏依頼の案件が入らない状態。

上記は、例外なくすべてのアーティストが同じ状況であることはご承知のとおりです。

しかし、音楽家として最も大きな問題は、経済的な問題ではありません。

それは・・・**本番がなくなる**ということです。

音楽家にとって、本番で養われる**“感性”**と**“感覚”**こそが最も重要であり、

本番の機会が失われる（少なくなる）ことは、

音楽家や芸術家が今まで表現してきた価値の喪失を意味します。

わかりやすく言えば、**音楽芸術分野が死んでしまいます**。



この状況は、緊急事態宣言が解除され、県をまたぐ往来ができるようになれば、

少しずつ状況が改善できるものと見込まれますが、ここでさらに大きな問題は、

すべての人々の**価値観がこの3か月で変わった**ということです。

満席のコンサートホール、満員のライブハウスに今までと同じ感覚で入れますか？

この問いに対する答えがすべてです。

もちろん、ファンの方は来てくださる方が多いでしょう。

ただ、たくさんの人々がいる空間で、今までのように何も気にせずに

音楽や芸術を**心の底から楽しむ**ことはできるのでしょうか？



▶ 価値観の根本的な見直しが必要 ①

前頁の“人々の価値観”が変容したことにより、主催者側も運営における価値観の見直しが必要

ソーシャルディスタンスの確保やチケットレス、換気や消毒といった基本的な対策はもちろん、打撃を受けた今だからこそ、そのまま通常運営に戻るのではなく、より掘り下げた対策を歩みを止めることなく継続して実施していく必要があります。

簡単に平常運転になるでしょうか？

“NIIGATA”として「本番」を開催する取り組みを具体的に施策する必要性 ①

・ 新潟県内の公共施設における通年での音楽及び文化芸術イベントの企画（土日）

→ 演奏家や芸術家に対する本番の創出。

県民へ音楽芸術に触れる機会の創出。

・ 新潟市の施設における通年での小規模ロビーコンサートの開催（美術館・区役所・公民館など）

→ コロナ禍を経て出演機会が更に減少している兼業演奏家や芸術家へ対する本番の創出。

一般利用者へ気軽に音楽芸術に触れる機会の創出。

・ 音楽ホールの利用に関して、プロの演奏家が土日に優先して予約を行えるシステムの構築

→ プロの演奏家の本番回数が減ることが本物の音楽芸術の喪失に繋がる。

これにより新潟が少なからず経済的な損失、もしくは経済創出の機会を失うことにも繋がる。

・ 音楽ホール等、イベントを行える会場の利用料等助成の実施

→ 会場を満席にできない中で採算をとるためにはチケット料金を上げる、もしくは物販などで売上を創出するほかない。

しかし、それぞれのアーティストには現在の相場があり、この先1～2年継続して金額を上げ続けることは非現実的である。

結果的に通常通りの利用料では、利益を上げるためのコンサートは開催しにくい状況が続く。

・ アーティスト助成カード（仮称）の創製

→ 申請登録でのカード一定期間の発行。（ビザのイメージ）

会場予約開始日の優遇及び利用料等の助成。



※出典：西新潟中央病院HP

▶ 価値観の根本的な見直しが必要 ②

“NIIGATA”として「本番」を開催する取り組みを具体的に施策する必要性 ②

・施設側での感染予防のための備品と人員確保

- ➔ フェイスシールドやマスクなど来場客の“安心”を担保できる備品の手配。
主催者側だけでなく、施設側で基準を設けて備品を用意することで来場者の“安心”を担保する。
近い将来、満席となるためのひとつの手段。

・小中高校へのスクールコンサートなど情操教育のさらなる推進

- ➔ 演奏家や芸術家に対する本番の創出とともに後進の育成に繋げる。
子どもたちが目の前で音楽芸術に触れる機会を“減らさない”。
次の世代へ向けた“生身の人間”が創り出す音楽芸術を目の前で伝えていく必要がある。

・企業へのアトラクション経費の補助もしくは控除対象とする制度

- ➔ 減少傾向にある企業のアトラクション出演機会の創出。
各企業の社員に対するコミュニケーション機会の創出。

・新潟市の特色ある場所での“野外”ライブ等の開催

- ➔ 鳥屋野潟、福島潟、信濃川、阿賀野川など。
新潟市民へ「近過ぎて行かないけど、素晴らしい場所」への気付きを提供。
音楽芸術を通じた、市民同士（同志）のコミュニケーション創り。

・“とにかく”オンライン化の「推進」が必要

- ➔ 生で聴く、観ることが最も大切なことが前提だが、すべてにおいてオフラインとオンラインの両立が必要。
コンサート、イベントのインターネット配信。（まずは大衆的に利用されているシステムやコンテンツ内で配信が必須）
新潟市の管理するコンテンツ内での音楽家、芸術家のPR収録と発信。（WEB上での一定数のフォロワーの確保のため）
新潟市としての文化芸術を発信するためのスタジオの設立。（既存の空間を利用するなど）

・市民ボランティアによる新潟市主催のコンサートPR活動

- ➔ 難しいことはなく、SNSで発信してもらえる仕組みづくり。
そのためには、まず「新潟市」としてフォローしてもらえる仕組みづくりが必要。



▶ 新潟市の文化を再考（再興）する

新潟文化芸術の素晴らしさを掘り下げ続ける“手抜きをしない”努力が必要

・ 既存メインイベントのブラッシュアップ

➡ 新潟まつり、アートミックスジャパン、日本海夕日コンサート、にいがた総踊りなど。

今まで“特に問題なく開催してきた”事業を見直すタイミング。それは本当に何も“問題なかった”のか。

置いてけぼりになっている市民（県民）を巻き込む考え方と、今までの実績を捨てることのない取り組みが必要。

・ 新潟の歴史から文化芸術を紐解き、伝承する

➡ およそ100年前、日本一の人口を誇っていた港町新潟の歴史をわかりやすく紐解き、現代の発展と振興に繋げる。

北前船、古町芸妓、津軽三味線、瞽女（ごぜ）、邦楽、ジャズ、クラシックなど。

現代では、個々が分断され、ただ単にそれぞれのジャンルで独立している。

これらをさらに紐解き、歴史として繋ぎ合わせる「編集作業」が新潟文化を発展させるためには必須。

・ 中央に依存しない文化の構築と発信

➡ 上記を踏まえ、歴史を辿れば新潟が日本文化のルーツであるということを表現できる。

流行の48人に頼るのではなく、新潟のアーティストを幼少期から育てていく土壌が、今こそ必要である。

一過性の表面的なものに頼らない文化芸術の土台づくりは、この状況だからこそ始められる。

・ “NIIGATA”芸術文化創造都市としての発信

➡ 新潟文化芸術みらい10年計画の策定。

第一歩として、来年度以降“文化芸術の祭典”を開催。

上記に伴い、会場規約の改定、予算策定、メインイベントの精査と抜本的な改革。



※出典：ガタブラ

▶ 音楽家のこれから

自身の音楽だけでは生活できない時代に突入

・ 組織として“強み”を明確化する

- ➡ 会社組織、NPO法人、一般社団法人など、組織として自身の音楽を明確化、ブランド化させる時代。
自身のチームとして、利益“だけ”を求める人々を除いたセルフプロデュース能力が求められる時代。

・ 新潟で土壌を築いてきた「三味線プレイヤー 史佳Fumyioshi」として（個人的な事項）

- ➡ 次回開催日未定で延期となった4月12日のロン・カーター氏とのコンサートの再演。
上記コンサートは、新潟市、新潟県からロン・カーター氏へ感謝状などを検討していただけると嬉しい。
アーティストビザが昨年取得できたこともあり、今後日本での仕事がないようであれば、来年から渡米を検討中。
世界の中心（人種のるつぼ）であるニューヨークの芸術文化を吸収し、新潟の芸術文化改革を行いたいと考えている。

・ 三味線アカデミーの設立

- ➡ 社団法人三味線アカデミー（仮称）の設立を検討中。
三味線のみならず、日本（新潟）文化を体現、体験できる受け皿を創出したいと考えている。

